

前年度国語総合問題と解答 芸術学部美術学科 全領域

二〇一八年度 一般入学試験〈二期〉・給費生入学試験「国語総合」

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『古語辞典』（大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編―岩波版）によると、「やはり」というのは、第一に「ゆつたり」としているさま。静かにじつとしているさま」だという。やはりのやははヤハヤハとかヤハラなどのヤハとおなじということだが、現在使われている「やはり」はこうした古い意味ではあるまい。第二の意味は「イゼン」として。転じて、予想通り。案の定」ということだが、おそらくこれにちがいない。大槻文彦『大言海』によれば、やはりとは「彌張ノ意ニモアラムカ」というが、それでも意味はよくわからない。ふつう、やはりは「矢張」と書くが、『広辞苑』ではそれを当て字としている。とすれば、こうした当て字からは意味はつかめないわけで、そのゴゲン^②については推測の域を出ない。

しかし、いずれにしても、私たちはこの言葉をさきの第二の意味、すなわち「予想通り」といった意味で使っていることはたしかのようである。アメリカの知人にこの言葉の意味をきかれたとき、私はしばらく考えたとすえ、as you knowというのがいちばん近いのではないか、とこたえた。そういえば、アメリカ人もふた言目にはYou know?という間投詞をさしはさむではないか。それとおなじだと教えたのである。

ところが、彼はナットク^③しなかった。アメリカ人のよく使うyou knowという言葉は、読んで字のごとく「あなたはご存知でしょう」ということであり、自分がしゃべっていることがらを相手が知っているか、もしくは理解しているか、それを確認しつつ話を進めているのであって、日本語の「やはり」とはニュアンスがちがう、というのである。言語の体系が異なる以上、完全な翻訳は不可能だと私は思ったのだが、「よく考えてみると、やはりとyou knowとでは、やはりどこかニュアンスがちがう。日本語の「やはり」には、as you knowと同時に、as I expectedすなわち、私が思っていたとおり、という意味もふくまれているからである。たとえば、「やっぱ、雨が降ってきた」というのは、「自分が予想していたように雨が降りだした」ということである。あるいは、「他の人がいっていたように」「天気予報で予告していたように」という意味だ。とすると、これを英語に訳す場合、やっぱ、をyou knowというわけにはいかない。つまり、「やはり」「やっぱ」という日本語は英語のyou knowではないということになる。

で、私は彼にそう説明した。すると彼は目をまるくして、こういった。「ほう、そうなんですか。してみると、日本人はみな予言者なんですね。何でも初めからわかっているんですから。わかっているから、やっぱ、を連発するんですよ」

^② たしかに、そういわれても仕方ないふしがある。やっぱ、雨が降ってきた、というのは、予想していたとおり、雨が降り始めた、ということである。自分が予想したにせよ、他人が予言したにせよ、あらかじめそう考えていたことには変わりはない。やっぱ、を頻繁^④に使う日本人はすべてにわたって予感に似たものを抱えている、ということになる。

そう。日本人の特質は、つねに何かを予想し、予期しているということなのである。それはある種の運命観といってもいい。日本人はいつもその予感のなかで生きているのだ。

このことはおそらく日本という風土、その自然環境と無関係ではあるまい。日本では——場所によって多少は異なるが——一年のうちで四季が三月月ずつに均等に配分されており、風月はまことに規則たたくジュンカン^④している。まさしく、「暑さ寒さも彼岸まで」というあんばいである。このような風土は世界広しといえども、きわめて例外に属する。他の地域では四季にはたいてい長短があり、雨期と乾期はあっても四季など持たぬ国さえ多いのだ。

四季が均等に分かれたれ、歳月がきわめて規則的にめぐる風土では、何もかもがはつきりと見通せる。二月の末ごろに強い風が吹くと、天気相談所に「この風は春一番か」という問い合わせがサットウ^⑤するそうだが、それは、もうそろそろ「春一番」が吹いてもよさそうだと、多くの人がそれを予想し、予期しているからなのである。そして、気象庁が「本日吹いた風は春一番です」というと、日本人は「やっぱり、そうか」とうなずいて安心し、新聞も大きな見出しでそれを報じる。同じことは「梅雨明け宣言」についてもいえよう。梅雨が明けたことをわざわざ宣言するというのは、日本人がみなそれを期待しているからなのだ。だからその期待にこたえなければならぬのである。そのような宣言によって日本人は「やっぱり」といって安心する。これが「やっぱり」の風土的背景といつてよからう。

しかし、「やっぱり」にはもうひとつ、社会的背景がある。それは日本の社会が世界でも珍しいほどの同質社会であることだ。地球上の多くの国々は民族と国民とが必ずしも重なっていない。ソビエトや中国やインドやアメリカ合衆国などの大きな国はもとより、シンガポールのような小さな国でも多くの民族が集まってひとつの国をつくっている。民族が異なるということは、言語や宗教や習慣がちがうことであり、したがってそのような社会では人間関係がきわめて複雑である。

ところが日本の場合には民族と国民とがほぼひとつになっており、この意味でたいへん気楽な社会だといえる。他国に見られるような民族的な軋轢^{あつれき}はこの国にはない。日本的な合意^{ワケモチ}というものが、他の国の人びとから奇異な目をもって見られているようだが、そのような暗黙の合意が成り立つというのも、この国が同質社会であるゆえだ。

しかし、同質の社会というものは、だからといって、必ずしも手放して気楽な社会というわけではない。同質社会には同質社会なりの圧力があるのだ。その圧力とは、おなじでなければならぬ、ということである。だからこそ日本はそのローラーによって、他のどんな国よりも——平等を理想とする社会主義国よりも——所得の格差が小さく、国民の大多数がみな「中流」をもって任じているのだ。九〇%以上の人がみなおなじ「中流」階級に属しているなどと思っている国は、ほかにない。

むろん、私はこれにイゾン^⑥があるわけではない。貧富の差がなく、国民の所得が平等に近いということは大いにケッコウな^⑦ことである。だが、人それぞれの意見までがおなじ、となると話はべつになる。いくら同質社会といっても、各人の意見までがおなじでなければならぬという道理はないからだ。(A)、同質社会は、とかく考え方までがおなじでなければならぬように思いこませしてしまうのである。日本人が人いちはい世間体を^{せけんたい}気にするのは、そのような無言の圧力のせいである。世間体を気にするというのは、自分が人

並外れてはいはしないかどうか、という臆病なまでの配慮と云っている。

とうぜん、何かについての自分の意見を発表する際には、そうした配慮が働く。日本という同質社会では、おなじことがいいことなのであり、人並み外れた意見というのは白い目で見られるからである。べつに危害を加えられるわけではないが、仲間外れにされてしまうのだ。日本人にとっては、仲間外れほどつらい仕打ちはない。なぜなら、仲間外れになるということは、日本人でなくなるような気にさせられることだからである。「バスに乗りおくれるな」とか、「梯子を外される」という表現は、そうした仕打ちに対する恐怖を正直に語っている。

(森本哲朗 『日本語 表と裏』 「やっぱり」 新潮文庫)

問一、①から⑦のカタカナを漢字に直しなさい。

問二、傍線1は、どういうところが違うのか、文中の言葉を使って答えなさい。

問三、傍線2で、筆者は何故そう考えるのか。文中の言葉を使って五〇字程度で答えなさい。

問四、傍線3「日本人の特質」とあるが、その背景として筆者が考えるものを二点あげ、それぞれ文中の言葉を使って五〇字以内で説明しなさい。

問五、文中(A)には、本文中に何度か使われている接続詞が入る。本文中から見つけて書き抜きなさい。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

幽霊のように、いま、この時代にいちばん必要なこととして、流通している言葉がある。

「絆」

だれがだれに向けて呼びかけている言葉なのか、わたしにはよくわからない。そうした「呼びかけ」の言葉をまわりで耳にしたこともない。とすると、東北の被災地へボランティアに^aかけつける人びとのモチベーションを上げるための言葉なのだろうか。あるいは、このたびの震災を機に、日々の暮らしのなかで「つながり」の大切さを痛感した人びとが、それをまわりの人たちに訴えるときの合い言葉なのだろうか。わたしには、何がⁱ具体的に必要かがくつきり見えているときに、人びとのあいだでそのようなⁱⁱ比喩の言葉が必要とするとは思えないのだが。

比喩というのは、「絆」がもともと「馬・犬・鷹^アなど、動物をつなぎとめる綱」(広辞苑)を意味する言葉だからである。「絆」とは「つながり」というよりも、(A)何かをⁱⁱⁱ繫縛するものであることは、いまはさておく。じっさい、「格差」を強く意識させられ、孤立のなかで^bピンコンに向きあっている人たちは、それに^{iv}抗う言葉を発しこそすれ、「絆」の回復を、とは口にしはしないだろう。

(B)「絆」は、政党団体や慈善団体をもふくめ、報道メディアや出版界など言論を^v生業とする人たちが

のあいだで流通している言葉のようにおもえてならない。「つながり」を否定する人はいないから、だれも表だって反対できない匿名の言葉として流通しているだけのようにおもえてならないのだ。

(C)、「絆」という言葉の裏には、「多様性」というもう一つの流通語が、¹空疎に響くだけに終わったという苦い認識があるのだろう。この認識について、かつて平川克美は、「多様というよりは、個々の欲望の目先が細分化し、お互いがお互いを参照する必要のないところで自己決定、自己実現しようともがいている光景」、つまりは「ひとりひとりが、ⁱⁱ分割されて、お互いに交通することをしなくなるといふことを。シヨウして、『多様性の時代』と言うなら、それは人間の本質的な多様性というものの価値を断念した時代という他はない」と書いた。

おもえば、戦後の高度成長期、わたしたちが生活の向上をめがけているときは、「三種の神器」に^dシヨウチヨウされるように、人びとの欲望は^ウ画一的であった。一九五〇年代後半にはテレビ、洗濯機、冷蔵庫が六〇年代半ばにはカラーテレビ、クーラー、自動車という3Cが、庶民の合い言葉となっていた。それが、少なくともⁱⁱⁱ主観的には「一億総中流」としてある程度達成されると、逆に欲望のかたちはばらけてくる。「豊かな生活のなかで人びとの嗜好は多様化してくる。幸福の記号やメニューが増えてくるのである。が、その「多様性」が、平川の^eシテキしたように「^①欲望の細分化」でしかなかったこと、ひいては人びとのあいだの交通の^エ遮断、つまりは分断の深化であったことは、おそらくまちがいない。

だからこそ人びとのあいだに「絆」を、というわけなのだろうが、いま必要なのは、「絆」というイメージの言語でその分断に^被をかけるのではなく、むしろその分断の、ひいては「格差」の認識を、さらに深めることではないのだろうか。他者とのあいだに厳然と存在する^オ溝の深さをさらに細部にわたって知ること、これは痛い認識である。けれどもそれを通してしか、ほんとうに必要なものは見えてこない。痛みを「分かちもつ」ことは^②その先にしかありえないとおもう。「絆」という言葉の被いは、多様性の前提となる差異の存在を覆い隠すものになってはならない。

(鷲田清一 『人生はいつもちぐはぐ』 「絆」という言葉にふれておもうこと 角川文庫)

問一、傍線部 a—e の片仮名を漢字に直しなさい。

問二、傍線部 アーオの漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問三、文中の (A) — (C) にあてはまる接続詞を、次の中からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

ア、だから イ、たしかに ウ、つまり エ、とすれば オ、むしろ

問四、文中の次の言葉の対義語を書きなさい。

i、具体的 ii、分割 iii、主観的

問五、傍線部①「欲望の細分化」とは何か、文中の語句を使って十五字以内で答えなさい。

問六、傍線部②の「その先」とはどの先か、文中の語句を使って二十字以内で答えなさい。

問七、著者は「絆」と「多様性」という言葉をめぐって、この言葉への危うさを指摘している。それはどのような危惧か、文中の言葉を使って二〇〇字以内で答えなさい。

【一】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ガジェットが大好きなので、新しい電子デバイスが出るとすぐに買ってしまおう。iPadも発売当日にゲットした。さっそく電子書籍なるものをダウンロードして読書を試みる。電子書籍の出現によって紙の本の命脈が尽きるのではないかという論が巷間に^a流布しているので、その可否を身を以て^aギンミしてみようというのである。結論はすぐに出た。

紙の本はなくならない。というか、紙の本という確固とした基盤ぬきにはそもそも電子書籍というものは存立することができないというのが私の結論である。その理由を以下に述べる。

① 電子書籍の第一の難点は「どこを読んでいるかわからない」ことである。

たしかに頁をめくると「ぱらり」と音がしたり、頁がたわんだり、反対側の活字が^イ透けて見えたりと、紙の本を読んでいる状態を擬似的には経験できる。だが、残り、何頁であるかがわからない。いったい自分が物語の中のどの部分を、どの方向に向かって読み進んでいるのかわからない。

自分が全体のどの部分を読んでいるかを鳥瞰的に絶えず点検することは（あまり指摘する人がいないが）読書する場合に必須の作業である。というのは、ある文章が冒頭近くにあるか、中程にあるか、巻末が迫ったところにあるかによって、その文章の解釈可能性に大きな^bサイが生じるからである。

例えば、推理小説の場合、「いかにも怪しげな人物」が物語のはじめの方に登場してきた場合には、ある程度小説を読み慣れた読者は「この人は犯人ではなく、いわゆる「レッドヘリング（読者を誤った推理に導くための偽りの手がかり）」である可能性が高い」という推論を行う。作者の方は読者をミスリードするために次々と「レッドヘリング」を投じてくる。「残り頁数」はその真贋判定の重要な手がかりである。「残り頁数」がある限度を切ると、そこから後は「読者をミスリードするようなトリック」はもう出てこないからである。そういう「ポイント・オブ・ノー・リターン」が存在する。グラウンドレベルで読み進んでいる自分を「読み始めから読み終わりまでの全行程を上空から鳥瞰している仮想的視座」からスキャンする力がなければ、そもそも読書を楽しむということは不可能なのである。その消息は音楽を聴く場合と変わらない。

音楽というのは、「もう聞こえない音」がまだ聞こえ、「まだ聞こえない音」がもう聞こえるという、時間意識の拡大を要求する。私たちはまるで当たり前のように「旋律」とか「リズム」とかいう言葉を口にしていて、これは「もう聞こえない音」を記憶によって、「まだ聞こえない音」を先駆的直感によって、現在に引き寄せることで経験しているから言えることなのである。そして、この音楽的経験は、「もう聞こえない音」「まだ聞こえない音」の範囲が広ければ広いほど深く厚みのあるものになる。現在の前後数秒の音しか再生できないというショート・メモリーの聴き手と、数十分の交響楽の最初から今までのすべての楽音を今再生でき、それを踏まえてこれから後の曲想の展開を予期しうる聴き手では、同一の楽音から引き出すことのできる快樂の質が違う。

私はその能力を「マッピング（地図上に自分の位置を記すこと）」と呼ぶのであるが、これは単に読書や音楽^c、カンショウに止まらず、人間が生きてゆく上で必須の能力なのである。

「おのれ自身を含む風景を鳥瞰する力」。ヘーゲルだったらそれを「自己意識」と呼ぶだろうし、フッサールだったら「超越論的主観性」と呼ぶだろう。別に何と呼んでも構わないが、それは人間が生きる上で不可欠の能力である。そして、読書はその力を涵養するための好個の機会なのである。

私たちは物語を読んでいるときに、つねに「物語を読み終えた未来の私」という仮想的な消失点を想定している。読書とは、「読みつつある私」と、物語を最後まで読み終え、すべての人物のすべての言動の、すべての謎めいた^ウ伏線の「ほんとうの意味」を理解した「読み終えた私」との共同作業なのである。紙の本では頁をめくることに、「読みつつある私」と「読み終えた私」の距離が縮まり、それと同時に「読み終えた私」の感じている愉悅が少しずつ先駆的に先取りされる。そして、最後のページの最後の一行を読み終えた瞬間に、ちようど山の両側からトンネルを掘り進んだ工夫たちが暗黒の一点で出会って、そこに一気に新鮮な空気が流れ込むように、「読みつつある私」は「読み終えた私」と出会う。読書というのは、そのような力動的なプロセスなのである。

電子書籍はこの「読み終えた私」への小刻みな^ウ接近感を読者にもたすことができない。紙の本という二次元的実体を相手にしているときには、「物語の終わりの接近」は指先が抑えている残り頁の厚みがしだいに減じてゆくという身体実感によって連続的に告知されている。だが、電子書籍ではそれが無い。仮に余白に「残り頁数」がデジタル表示されていても、^②電子書籍読書では、「読み終えた私」という仮想的存在にはパーティへの招待状が送られていないのである。

第二の難点は、^③電子書籍では「宿命的な出会い」が起らないということである。書店にいと、その題名も著者名も知らない本に、まるで引き寄せられるように近づき、それを手に取ったときに「自分が今まさに読みたいと思っていたその本」に出会うということが起こる。題名も著者名も主題も何も知らぬまま「何となく本を手に取る」とき、私たちをその本に「惹きつけた力」とは何なのであろう。それがどのような本であるかについての予備知識がないにもかかわらず、その本の私たちにとっての死活的重要性が先駆的に^ウわかるということはなぜ起きるのであろう。説明は二つある。

一つは、本の送り手（書き手も編集者も装幀家も書店員も含めて）がその本に敬意と愛情を込めている本には固有のオーラがある、ということである。長年使い込んだ道具に「手沢」がつくように、送り手たちの「思い」のこもった本には独特の「つや」が出る。私たちは書店を遊^{ゆうよく}んでいるときに、その「つや」に反応する。作家が書き飛ばし、出版社もやつつけ仕事で送り出し、書店員もなげやりに配架したような本には、その「つや」がない。それは、物質的に^ウわかる。

もう一つは「こじつけ」である。「なんとなく」手に取った本のどうでもよいような一行が「自分の人生を決定づける宿命の一行」であったというのは、実は本を読んだあとに思いついた「あとちえ」である。どんな本でも、真剣に読めばものの考え方や感じ方が多少は変わる。一読して変わったあとの自分を「より本来的な自分」であると思えば（人間は必ずそう思い込む）、その本との出会いはおのれの進むべき道を指し示す、宿命との出会いだったということになる。

「こじつけ」なのだが、それでよいのである。ただし、「宿命と出会う」ためには、そこに偶然がなければならぬ。

どの本を手にとってもよかったのだが、他ならぬその本を「たまたま」手に取ってしまったという偶有性が保証されていなければ、「宿命」という言葉は出てこない。そのためには「事前にその本については、いかなる予断も持っていなかった」という自己申告が不可欠である。書評で「ゼツサン^dされていたり、友だちに熱心に^e ススメられたり、夏休みの課題図書であつたりした本は、どれほど面白く読んでも、それを「宿命の出会い」だと言^エい募^エることはできない。そこには人為が介在しているからだ。

「宿命の本」との出会いのためには、「独特のオーラに反応して、引き寄せられるように手に取った」という「物語」がどうしても必要である。そして、それは紙の本でしかなしえない。「いつかこの本が私にとって死活的に重要なものとなるかもしれない」という種類の先駆的直感^フは電子書籍については起動しないからである。電子書籍の最大のメリットは、いつでもオン・デマンドで、タイムラグなしにアクセスできるということなのだが、まさにそのメリットゆえに私たちは電子書籍の選書において先駆的直感を必要としない。電子書籍はスーパーリアルに「今読みたい本、読む必要がある本」を私たちに届けてくれる。その代償として、電子書籍はその本との宿命的な出会いという「物語」への共犯的参加^フを読者に求めない。電子書籍は実需要^フ、対応の情報入力源^フである。

欲望も宿命も自己同一性も、そのようなロマネスクなものに電子書籍は用事がない。けれども、読者はしばしばそちらの方に用があるのである。

(内田 樹 「活字中毒患者は電子書籍で本を読むか？」 池澤夏樹・編 『本は、これから』 岩波新書)

問一、傍線ア―エの漢字の読みを答えなさい。

問二、傍線 a―e のカタカナを漢字に直しなさい。

問三、傍線①で「どこを読んでいるかわからない」とあるが、これは「読書」についてどのような考えを持っているから述べたのか。文中からその考えを述べている部分を二カ所見つけ、それぞれ最初と最後の五文字を書き抜きなさい。

問四、傍線②「電子書籍読書では・・・送られていないのである。」とは、どんなことを例えているのか。

文中の語句を使って説明しなさい。

問五、傍線③「電子書籍では『宿命的な出会い』が起こらない」とあるが、

A、「宿命的な出会い」とはどのようなことを述べているのか、文中の言葉を使って説明しなさい。

B、「電子書籍では『宿命的な出会い』が起こらない」と筆者が述べているのはなぜか。文中の語句を使って簡単に説明しなさい。

【二】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

環境と対環境戦略

環境という言葉は、今ではさまざまな意味で使われているが、もともとは「主体」の存在や活動に何らかの影響を与える外界の事物や条件などをさす。何を主体と考えるかによって、その環境を構成する事物・事象、空間的な範囲などは大きく異なる。たとえば、動物の体内に寄生する寄生虫にとつての環境は、その宿主の動物の腸管などの特定の ^aキカンがほとんどすべてともいえるが、季節ごとに数千キロの渡りをする渡り鳥の環境は、繁殖地および越冬地の湿原や森林に加えて渡りの中継地の生態系をも含めた空間的な広がりの大きいものとなる。

ヒトをはじめとする生物の生存と活動、その帰結としての適応度（個体が残す子どもの数で表される次世代への貢献度）に影響を与える環境の要素はきわめて多岐にわたる。

環境の要素には、光や温度とその変動、火山活動などのように無生物的なものと、他の生物の存在や活動などといった生物的なものがある。植物の生き残り・成長・繁殖の成否を通じて、適応度に影響を与える環境の要素にどのようなものがあるかをあげてみよう。まず、光合成による物質生産に必要な資源として光、水、栄養塩（肥料）があり、温度も重要な影響を及ぼす。葉を食べたり汁を吸ったりする昆虫は、光合成で稼いだものを消費してしまうため適応度を引き下げる生物的な環境要素である。カビや細菌などの病害を引き起こす生物要素もある。花が咲いて、実を結び、種子が分散することにかかわる生物的環境要素として重要なのは、花粉を運ぶ昆虫や種子の分散を助ける鳥や獣などのさまざまな動物である。それらの多くは植物が提供する何らかの餌をめあてに花や果実を訪れ、あるいは利用することで花粉や種子の移動を ^bバイカイし、植物の繁殖を助ける。すなわち、^①それらと植物とは互いに適応度にプラスに作用しあう共生的生物間相互作用で結ばれている。いっぽう、花や果実を食害することで繁殖を妨げる虫や鳥や獣もいる。これらは適応度を引き下げる生物的環境要素であるといえる。前章では、ヒトがかかわるものも含め、生物環境作用としての生物間相互作用が生命の歴史を通じ、生物多様性にダイナミックな変化をもたらした影響を記述した。

これらを通じ、生き残りをかけて生物はさまざまに進化してきた。生態学では、これらの自然淘汰^{とうた}による適応進化で獲得された遺伝的な形質やその組みあわせを「戦略」と呼ぶ。その生物の一生のさまざまな時期に発現する生活のあり方ともいえる生活史戦略、確実な繁殖を保障する繁殖戦略などである。

ヒトの場合にはそのような遺伝子に組みこまれた戦略に加えて、言語によるコミュニケーションを通じて集団化され世代をも超える「戦略」を持つことができる。生態的・進化的プロセスによって発達する戦略と、世代内・世代間のコミュニケーションによる文化的・社会的なプロセスにも依存して形作られる戦略の両方が、ヒトの対環境戦略であるといつてよいだろう。両タイプの戦略はいずれも、与えられた環境のなかでよりうまく振る舞って多くの子孫を残すことに寄与する。そこで、本書では、自然淘汰によって進化する生物一般に共通の戦略と、それをベースにしながらも文化的・社会的なプロセスによって形作られるヒトの戦略の両

方を含めて「^②対環境戦略」と呼ぶことにする。

ここで重要な点は、文化的・社会的なプロセスによる戦略の絶大な影響のもとにおかれる人間ではあるが、あらゆる活動において、「生物としてのヒト」から離れることができないということである。どのように高度な文明を発達させようとも、また、いかに複雑な精神生活を、イトナむようになろうとも、ヒトである人間は、生物一般に課せられる「環境の制約」から逃れることはできないのである。

環境の要素の中には「A」がある。「A」とは、主体がその生存、活動、繁殖に必要とするもののうち、主体の活動にともなって消費あるいは^dセンユウされるものである。たとえば、餌や水、植物にとつての光などがこれにあたる。光は上部に葉を広げた植物に利用されれば、下方の植物は利用できない。したがって、個体間や集団（個体群、種）間に競争が生じる。

主体と環境との関係は、相互作用であり、環境が主体に影響を与える（作用）いつぼうで、主体の活動は、環境に影響を与えてそれを変化させる（反作用）。さらに環境を構成している要素の間にもさまざまな相互作用が成り立っており、それらは時間とともに常にダイナミックに変化する。その相互作用が主体の適応度を大きく左右することから、生物には対環境戦略として捉^{とら}えることのできるさまざまな形質やその組みあわせがあり、常に進化している。

環境は主体に対して作用を及ぼすとともに、主体の活動によって変化する。生物は単に環境の作用を受け、その活動によって環境に影響を与えるだけではない。適応進化によって環境との作用のあり方を変化させる。適応進化は、適応度に及ぼす淘汰と呼ばれる環境の作用を基礎として、個体群の遺伝的な特性が変化していくことを意味するが、このプロセスが、隔離と組みあわせされると、それぞれの個体群の独自の適応進化によって、種の分化にともなう多様化が起こる。生物と環境の関係は、単純な作用―反作用系としてだけではなく、^③生態的現象と進化的現象の二つの相^あで捉えるべきものである。

生物としてのヒトを捉えた場合、周囲の環境との相互作用においてもっとも基本となることは、まず、当然のことながら、環境から資源を得て生活するということである。衣食住やその他の活動にヒトが必要とする資源は、水や石などの無生物であることもあるが、その多くが他の生物やあるいはその生産物である。この場合、ヒトは、他の動植物に捕食や食害という影響を及ぼす。他方、生活のなかで不可避免的に生じる排泄物や不要物を自然界の物質循環に委^{ゆた}ねることも生活条件の維持のために欠かせない。ヒトが必要とする循環や排出した汚物を、^eジョウカする作用は、植物、ミミズなどの土壌動物、微生物などの働きに負うところが大きい。

いつぼうで、ヒトは、その資源となる生物、すなわち、作物、家畜、水産物、材木などをめぐって、植物食の動物や捕食者、あるいは資源生物に寄生する病原生物と競争関係にある。もちろん、わずかではあるがヒトを捕食する動物、そして^④時として大きな影響力を持つヒトに寄生する微生物やウイルスも、ヒトの対環境戦略にかかわる生物因子である。大型の哺乳動物であるヒトを捕食する動物はそれほど多くはなく、その影響は過去においてもそれほど大きくなかったと思われるが、寄生生物の影響は人口密度が高まるにつれて増大するから、現代の高度に発達した科学をもつてしても、その影響は制御しがたいものとなっている。いつぼう、無生物的な環境要因である極端な温度や乾燥、自然の災害などがヒトの生活にもたらす影響はきわめ

て大きい。一見無生物的なそれらの影響の背後には、何らかの生物因子がさまざまな形でかかわっていることも少なくない。

(鷺谷いづみ 『自然再生』 中公新書)

問一、文中の a―e の片仮名を漢字にしなさい。

問二、傍線部①の植物と「共生的生物間相互作用で結ばれている」「それら」とは何か、本文中の言葉を使って答えなさい。

問三、傍線部②の「対環境戦略」とは何か本文中の言葉を使って、説明しなさい。

問四、「A」に入る語句を次から選び、記号で答えなさい。

a 生物 b 資源 c 文化 d 無生物 e 進化

問五、傍線部③「生態的現象と進化的現象の二つの相」とは何か、文中の語句を使って一三〇字以内で答えなさい。

問六、傍線部④「時として大きな影響力を持つ」とあるが、具体的にどのようなことを述べているか、文中から見つけ、最初と最後の五文字を書き抜きなさい。